

## 道徳的アイデンティティに関連する海外文献レビュー

岡田 康孝

(キーワード：道徳的アイデンティティ 道徳的行動 道徳教育)

### 目的

道徳的行動の動機づけに関する研究は、Kohlbergの認知発達理論に基づき、道徳的推論の役割に焦点が当てられてきた。Kohlbergは、個人が道徳的判断を下す際に用いる推論パターンを6つの発達段階に分類し、高い段階に達するほど個人は普遍的な道徳原理に基づいて行動すると考えた。Kohlbergはまた、道徳的推論の能力が成熟するにつれて、個人は道徳的状况において判断を下す際に道徳原理を用いる傾向が強くなり、道徳的推論が発達するにつれて、道徳原理とその普遍的で規定的な性質はより顕著になり、個人は自分が道徳的判断と一致した行動をとらざるを得ないと感じるようになるとした。日本においても、この理論を援用した道徳科の授業実践が数多く積み重ねられてきた。しかし一方では、道徳的推論は道徳的行動を予測するのに十分ではないことや、道徳性の高い人は必ずしも高度な道徳的推論能力を持っているわけではないこと(Colby&Damon, 1992)が示され、道徳的行動における道徳的推論の影響は限定的であると理解されている。それゆえ道徳的推論(あるいは道徳的感情)と道徳的行動とのギャップを埋めるものにはどのような要因があるのかということに、道徳性心理学の関心が向けられるようになった。

道徳的アイデンティティ(moral identity)は、このような、道徳的推論と道徳的行動とのギャップを埋める構成概念の一つとして注目されている。Blasi(1984)は、道徳的アイデンティティを、自分自身を道徳的な人間として捉えることや、自分の行動が自分の道徳的価値観と一致することに重要性を置くことであると定義した。個人が自分のアイデンティティにおいて道徳性を重視するほど、自分の行動を自分の信念や価値観に沿って調整しようとする傾向が強くなり、その結果、個人はより一貫した道徳的行動を示すことが期待されるであろう。

アイデンティティの確立は、日本における道徳教育の中心的テーマでもある。学習指導要領解説総則編には小学校、中学校ともに以下の記述がある。「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」(文部科学省, 2017ab)。また高等学校における道徳教育の目標は、「人間としての在り方生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」(文部科学省, 2018)とされている。これらの記述からも確認できるように、日本において道徳教育が最終的に求めているのは、生きる主体としての自己を確立し、自らの価値観に従って主体的に生きようとする人間像である。その鍵概念となるものとして道徳的アイデンティティは注目される。それは、指導方法、評価、カリキュラムの改善というレベルでの寄与はもちろん、目標概念の理解にも新しい視点を与える可能性のある意義深い研究領域であるといえる。しかし、日本国内において道徳的アイデンティティについての実証的研究はわずかであり、道徳的アイデンティティの概念の検討も十分とは言えない(河村ら, 2017; 高井・寺井, 2013, 2019; 川崎, 2022)。よって、道徳教育への応用という視点での研究はさらに限定的である(松尾, 2016, 2017)。

そこで、本稿では道徳的アイデンティティという概念が、日本の道徳教育においてどのような意義を持つのか、どのように道徳教育に寄与するのかを探ることを遠位の目的としながら、先行する海外の道徳的アイデンティティの領域における心理学的研究を概観することを目的とする。本稿では道徳的アイデンティティの主な概念を取り上げ、道徳的アイデンティティと道徳的行動との関係及び道徳的アイデンティティの発達についての研究の動向を展望する。

## 道徳的アイデンティティの概念化

道徳的アイデンティティに対するほとんどのアプローチは、人格特性的な視点、あるいは社会的認知の視点に分類することができる。以下に、それぞれの視点から概観する。

### ・人格特性的な視点

人格特性的な視点から分類される道徳的アイデンティティの中心的概念は、道徳性が自分のアイデンティティの中心であり、自分の個人的価値観や目標と一体化している度合いについての個人差として記述するものである。道徳的アイデンティティに対するこのアプローチの大きな出発点は、Blasi(1983, 2004)の研究である。

Blasiは、道徳的推論と道徳的行動との間に必ずしも一致がないことに注目し、その一致性を高める要因として道徳的アイデンティティを提唱した。Blasiによれば、道徳的アイデンティティは、自分が持つ道徳観が自己の感覚にとってどの程度重要で中心的であるかということを反映したものである。自分のアイデンティティが道徳観によって強く支えられている場合、自分の行動がその道徳観に沿っているかどうかが重要な問題となり、自己一致性や自己誠実性を保つためには道徳観に基づいて行動することが必要になる。逆に、自分のアイデンティティが道徳観によってあまり影響されていない場合、自分の行動がその道徳観に反していてもそれほど気にならず、他の要因（例えば利害や感情）によって行動することが容易になる。Blasiは、このような道徳的アイデンティティは、自己の体系と一致する行動を取るよう動機づけられる人間固有の傾向に基づいており、自己の感覚は成長するにつれて変化すると指摘した。主観的アイデンティティが成熟するにつれて、自己の感覚は外部から与えられたものではなく内部から生まれたものに基づくようになり、自分が最も大切だと思うものが中核的な自己に積極的に組み込まれるようになる。したがって、ある道徳観が自分のアイデンティティの中心に位置づけられると、その道徳観を実践することが強く望まれるようになり、その道徳観から外れることは強い否定的感情を引き起こすことになる。しかし、道徳的アイデンティティは個人差の一側面でもあり、それぞれの内容や強度は多様である。道徳的アイデンティティがどの程度強固であるかについて、Blasiは「意志力」「誠実さ」「道徳的欲求」という3つの要素を提案し、「道徳的欲求は意志力と誠実さを導き、それらに道徳的意義を与える」として、これら3つの要素は安定的で意識的な努力によって培われると述べた。このモデルでは、アイデンティティは自らの目標や関心事の階層的な配置を決定し、それによって主観的な統一感と生涯にわたる方向性を生み出し、個人に深みと個人的意義の感覚を与えるとする。アイデンティティは道徳的誠実性の重要な一部であり、道徳的人格全体へと結実するものである。

ColbyとDamon(Colby&Damon, 1992)は、Blasiの考えと一致するように、道徳的アイデンティティを自己と道徳との統一性として強調した。彼らは成人の道徳的模範者を詳細に調査した結果、そのような人々が自分自身の個人的な興味や欲望が道徳的に正しいものであるというような、自己と道徳の間が一体となったような感覚を経験していることを発見した。規範者の道徳的アイデンティティは自己アイデンティティと緊密に統合され、ほとんど融合しており、自分の道徳的感覚に従わないことによるのみ自己を否定することになる。彼らは模範的な道徳的コミットメントに関してジレンマや選択を伴うとは認識しておらず、ただ自分がなすべきことをなしているだけであり、自己否定を必要とする犠牲とは見なされないことも発見した。さらにその後の研究では、このような道徳へのコミットメントにおいて重要な美徳として「誠実」「謙虚さ」「信じる心」を挙げている(Damon&Colby, 2015 渡部訳2020)。その一方で、ColbyとDamonは現代西洋社会ではほとんどの人が自己の利害と道徳的感性が競合していることを認めており(p. 297)、その競合を解決するためには高度な発達が必要であることを示唆している。

FrimerとWalker(Frimer&Walker, 2009)は、自分が持つ道徳観が自己の感覚にとってどの程度中心的であるかということをも道徳的中心性とし、主体的価値観(達成や権力)と共同体的価値観(博愛や普遍主義)が互いに統合されている度合いとして概念化した。そして、一般的には緊張関係にある両者が相乗効果に変化することを仮定した「和解モデル」を提案した。このような主体的価値観と共同体的価値観の統合は、道徳的動機づけとコミットメントの強力な源泉となりうる(Frimer&Walker, 2009)。大学生を対象に行われた彼らの研究では、道徳的行動は共同体的価値観によって正に予測され、主体的価値観によって負に予測された。また、参加者がナラティブに主体的テーマと共同体的テーマの両方を織り込んでいることと、規範的道徳行動との間には正の関係があることも明らかにした。さらに続く研究で、道徳的模範者は、より主体的で共同体的なテーマを引き出し、それらをナラティブや個人的目標の中に統合していることがわかった(Frimer et al., 2011)。道徳的模範者にとって利己心とは純粋に金銭的利益や社会的優位などとしてではなく、より道徳的な向上といった意味で理解されており、彼

らにとって他者の利益を促進することが、自分自身の状態を改善する最も適応的な方法となっていた。青年期にはだれしも主体的価値観と共同体の価値観の間で高まる緊張を経験しているが、それぞれの志向性を発達させること自体が重要な課題であり、それは道徳的模範者にとっても和解のプロセスの前提となるものである。主体的価値観と共同体の価値観についての「和解モデル」は、道徳的規範者が生来の例外的な人物の姿ではなく、普通の人物の成熟した姿である可能性を示唆している。

特に青年期にこのような形で共同体の価値観を自分のアイデンティティにうまく統合できた人は、おそらく道徳的判断の結果に従ってより一貫した行動をとる傾向がある。このような道徳的中心性がどの程度安定しているかについて、少なくともこれらの研究では、主体的価値観と共同体の価値観という統合された価値は、一度達成されれば比較的安定したものであることが示唆されており、道徳的中心性は成熟した形では、かなり安定した性格の特徴に近いと思われる(Bock&Samuelson, 2014)。しかし、統合がうまくいかなかった場合、道徳的認知と道徳的行動の因果関係は弱まると考えられる。

#### ・社会的認知の視点

社会的認知理論では、パーソナリティは状況的影響と相互作用する認知的-感情的プロセスの動的システムだと見なされる。この理論に基づく道徳的アイデンティティの研究は、道徳的機能の根底にある社会的認知のメカニズムを明らかにしようとするものである(Hardy& Carlo, 2011)。

Winterichら(Winterich et al., 2013)は道徳的アイデンティティを「自分の道徳的性格の心的表現であり、認知スキーマとして内在化されており、自分の行動を通じて外部に表現されるもの」と定義している。彼らは、人格的特性の視点から道徳的アイデンティティを理解することには一定の根拠があると認めつつも、この視点だけでは道徳的行動を十分に説明できないと指摘している。その課題として次の二点が挙げられる。一つ目は、日常的な道徳的行動の大部分を占めるであろう、意識的な自覚の外にある、自動的で直観的なプロセス(Haidt, 2008; Lapsley& Narvaez, 2004)について十分に説明できないことである。二つ目は、アイデンティティが多面的で可変的な性質を持ち、状況や役割に応じて異なる自己表象が活性化されることを考慮できないことである。

AquinoとKayは道徳的アイデンティティを社会的認知の枠組みで捉えることにより、こうした限界に対処できると主張している(Aquino&Kay, 2018)。彼らのモデルは、アイデンティティ理論に基づいて自己概念を適合させ、道徳的アイデンティティに「内在化」と「象徴化」という二つの次元を導入したものである。内在化は、道徳的アイデンティティが自己概念の中心に位置するという人々の主観的経験を反映するもので、道徳的アイデンティティの本質を捉えるものである。象徴化は、人々が道徳的アイデンティティを社会的な外見や行動を通じて表出する傾向を反映し、道徳的アイデンティティの表現を捉えるものである(Aquino&Kay, 2018)。自己は主体としても行為者としても存在するが、主体としての自己は私的であり利己的な動機に左右されやすい一方、行為者としての自己は社会集団への帰属感や互恵的な交換の利益によって生存が促進されることを認識している。この点において、向社会的行動の様々な領域における影響力は、道徳的アイデンティティの内在化よりも象徴化の方が大きいことが示されており(Gotowiec& van Mastrigt, 2019)、内在化と象徴化はそれぞれ異なる予測力を持つことが分かっている。

このモデルにおいて道徳的アイデンティティが高い人とは、作業的自己概念の中で、道徳的アイデンティティを構成するスキーマに対して、より多くより速くアクセスできる人である。道徳的アイデンティティを構成するスキーマへのアクセシビリティがより強い場合、それが社会的情報を処理するために容易かつ迅速に利用可能となる。それはすなわち、その人にとって自己意識のより本質的な側面として経験されるということである(Aquino et al., 2009)。そしてこのアクセシビリティの強さは個人によって異なるため、道徳的アイデンティティはそれぞれ人格的な特性のように扱うことができる。

このような特徴は、道徳的行動の自動的で直観的なプロセスを理解する上で重要な役割を果たしている。AquinoとKayは、人間の認知にはシステム1とシステム2という二つの過程があるという二重過程モデルを用いて、道徳的アイデンティティは感情や迅速で自動的な価値判断を生み出すシステム1の一部であると述べている(Aquino&Kay, 2018)。このモデルは人の道徳的アイデンティティを構成する特質は、道徳的な人であることを意味するプロトタイプ(Walker&Pitts, 1998) (例えば、正直、親切、思いやり)に対応するものであるという仮定に基づいている。Reynolds(2006)は、プロトタイプとは比喩ではなく、迅速で直感的な判断を形成するために使われる実際の神経化学的な刷り込みであると提唱した。道徳的アイデンティティが本当に道徳的プロトタイプの一形態であるとするならば、他のプロトタイプと同様に、それは神経化学的レベルで人々の行動に影響を与えることができる。これは道徳的アイデンティティが判断のヒューリスティックとして機能する可能性があるということ



でもある(O'Reilly et al., 2016)。プロトタイプがどのようなものと考えられているかということよりも、道徳的行動は意識化されない自動的で直感的なプロセスの産物であるという認識が、このモデルの要諦である(Aquino & Kay, 2018)。

また、このモデルでは人の道徳的アイデンティティを構成するスキーマは、状況やコンテキストによって活性化されたり抑制されたりすると推定される。これは、自己表象が多面的で可変的であることを反映している。つまり、人は自分自身を異なる方法で表現したり理解したりすることができる。例えば、ある状況では親切さや思いやりが重要な自己表象として活性化されるかもしれないし、別の状況では正直さや公正さが重要な自己表象として活性化されるかもしれない。このようにして、道徳的アイデンティティは状況に応じて柔軟に変化することができる(Aquino et al., 2009)。

さらに、道徳的アイデンティティはそのアクセシビリティの強さに関わらず、状況的な手がかりによって活性化(あるいは不活性化)される可能性がある。つまり、道徳的アイデンティティへのアクセスが弱い人であっても、状況的な手がかりによって一時的に強い道徳的アイデンティティを呼び起こされることがあるのである。

このように社会的認知モデルは、道徳的アイデンティティを構成するスキーマへのアクセシビリティと状況的な手がかりへの感受性を組み合わせることで、道徳的人格特性の個人内の安定性と一貫性、および状況間の道徳的行動の変動性の両方を説明することができる(Aquino et al., 2009)。

現在、道徳的アイデンティティに関する研究は、社会的認知モデルからの検討が優勢であるが、人格特性モデルからは、次のような批判もある。社会的認知モデルは、道徳的アイデンティティの内在化と象徴化の次元が独立であると仮定しているが、実際には両者に相関がある可能性が高い(Hardy & Carlo, 2011)。また社会的認知モデルは、状況的な手がかりが道徳的アイデンティティを活性化または不活性化すると考えているが、実際には個人の解釈や評価も重要である。とはいえ社会的認知モデルと人格特性モデルは、それぞれ異なる側面やレベルで道徳を理解しようとする有用な枠組みであることに変わりはない。両者を統合することで、より包括的で精密な道徳的アイデンティティ理論が展開される可能性がある。

## 道徳的アイデンティティと道徳的行動との関係

述べてきたように、強い道徳的アイデンティティを持つ個人は、一般的に道徳的行動に多く関与すると考えられている。この効果を説明するために、個人の自己意識にとっての道徳性の重要性に根ざした様々な心理的メカニズムが提案され、人格特性的視点と社会的認知の視点の両方の観点を取り入れながら、発展・洗練されてきた。現在の研究で支配的なのは社会的認知の視点であり、道徳的アイデンティティは自己調節スキーマとして機能し、そのアクセシビリティが道徳的行動に影響を与えると説明されている(Jennings et al., 2015; Gotowiec & van Mastrigt, 2019)。

このような道徳的アイデンティティ概念を測定するために Aquino と Reed(2002)は MIS(Moral Identity Scale)を作成した。MIS は自己報告式の質問紙であり、参加者に自分自身を道徳的特質のグループ(思いやり、公正、勤勉など)で評価するよう求めるものである。また MIS は、「内在化」と「象徴化」という二つの次元からなり、それぞれが自己概念の中心性と社会的な外見性を反映している。

道徳的アイデンティティと行動に関する研究についてメタ分析を行った Hertz と Krettenauer(2016)は、この分野の研究の約65%が MIS を用いていることを指摘し、現存する道徳的アイデンティティ研究を論じる際に最も重要な参照点となると述べている。そこで以下では、まず MIS を用いた研究の知見について概観する。

まず、直接的な効果として、道徳的アイデンティティが高い人は、一般的に他者や社会に対してより貢献的で協力的な行動をとる傾向があることが示されている。例えば、道徳的アイデンティティは、ボランティア活動(Aquino & Reed, 2002; Winterich et al., 2013)、慈善寄付(Reed, Aquino, & Levy, 2007)、公正な取引(Reed & Aquino, 2003)などの向社会的行動と正の相関があることが報告されている。

道徳的アイデンティティは状況的な手がかりによって一時的に顕著になったり希薄になったりすることもあり、その場合にも同様の効果が見られることがある。例えば、Aquino ら(Aquino et al., 2009)は、道徳的アイデンティティが活性化された人は、他者の利益のために自分の経済的利益を犠牲にすることをより厭わなくなると報告している。

Reed ら(Reed et al., 2016)は、道徳的アイデンティティが活性化された人は、向社会的な大義のために時間を提供することに嫌悪感を抱かなくなることを実験で示している。逆に、道徳的アイデンティティを希薄にすると、

利己的な行動をとる可能性が高まることが示されている例もある。例えば、Aquinoら(2009)の研究では、金銭的な業績インセンティブが道徳的アイデンティティの顕著性を低下させ、ビジネス交渉においてより人を欺くようになったと報告している。

次に、間接的な効果として、道徳的アイデンティティは他の動機づけ因子(例えば自己の一貫性や社会的な帰属感などの心理的ニーズ)や認知プロセスと相互作用することで、道徳的行動に影響を及ぼすことが明らかになっている。

Aquinoら(Aquino et al., 2011)は、道徳的高揚状態(自分が善い行いをしたと感じる状態)を経験した後の行動について、道徳的アイデンティティが高い人ほど、より当たり障りなく振舞おうとする傾向があることを示した。

Winterichら(Winterich et al., 2012)は、道徳的アイデンティティが高い人にとって、自身の政治的アイデンティティと慈善事業が支援する対象や目的とが一致していると認識されることが、より多くの寄付をする動機付けになることを示した。すなわち自分の政治的な価値観や信念を表現するだけでなく、自分の道徳的な価値観や信念に忠実であることを示すために寄付を行うのである。

道徳的アイデンティティと道徳的離脱(自分の行動が道徳的でないということを認めないこと)との関係について、Yangら(2020)は、中国の大学生を対象にした実験を行い、道徳的アイデンティティと利他的態度は、道徳的離脱と有意に負の相関があり、道徳的アイデンティティが低く、利他的態度が低い参加者ほど道徳的離脱が起りやすいことを報告している。この結果は、道徳的アイデンティティが高い人は、自分の行動と自己概念との一致性を保つために、より道徳的な行動を選択する傾向があることを示唆している。

SchipperとKoglin(2021)は、道徳的アイデンティティが道徳的決定にどのように影響するかを調べるために、ドイツの中高校生に対して様々な道徳的ジレンマ(正しい行動が明確でない場合)を提示し、自分ならどのように行動するかを尋ねる実験を行った。その結果、道徳的アイデンティティが高い人は、他の懸念(例えば、自分の利益や他者の期待)よりも道徳的懸念(例えば、正義や公平性)を優先する可能性が高いことが分かった。このことから強い道徳的アイデンティティを持つ個人は、自分の行動がどのような行動規範や原則に沿っているかに対して他の人よりも敏感であると指摘している。このことは、道徳的アイデンティティが高まるにつれて責任感が増大し、道徳的アイデンティティが義務感の肯定的な予測因子であることを裏付けている。道徳的アイデンティティが個人のアイデンティティにとって極めて重要になると、道徳的に行動しなければならないという責任感が高まるのである。この関係は、Blasi(1983)が提唱した道徳的行為の拘束性の程度に関する仮定に近いものである。Blasiは、判断の拘束性はそれぞれの人の自己定義に依存し、自己定義と一致しない判断は拘束力を失うと主張している。

さらにSchipperとKoglin(2021)は、道徳的アイデンティティと道徳的感情(自分の行動に対する良心や罪悪感)との関係も調べた。その結果、道徳的アイデンティティが高ければ高いほど、若者は利己的な決定をすることを悪く感じるようになった。このことは、個人の道徳的アイデンティティと行動との不一致が否定的な自己評価感情と関連し、否定的感情を生じさせることを示している。この関係は、Bandura(1999)が提唱した自己規制モデルに基づくものである。自己規制モデルでは、個人は自分の行動を自己基準や社会基準と比較し、それらと一致しない場合には罪悪感や恥辱感などの否定的感情を経験するとされている。

また、社会的認知モデルの特徴に従い、道徳的アイデンティティが、道徳的ジレンマに対する個人の反応にどのように影響するかを調べた研究がある(Xu & Ma, 2015)。それによれば、道徳的アイデンティティが高い人は、道徳的ジレンマの判断において自らの道徳的スキーマに容易にアクセスできるため、誘惑に抵抗するために認知的資源(注意や記憶などの限られた情報処理能力)に頼る必要がなく、概して誠実であり、道徳的行動は自動的なプロセスとして生じる。一方道徳的アイデンティティが弱く、道徳的スキーマに容易にアクセスできない人は、認知的資源を使って自分をコントロールする必要がある、誘惑に打ち勝つ意志の力に頼る必要がある。しかし、それらの人々は誘惑に打ち勝つことに失敗することの方が多かった。これらの知見は、道徳的行動の多くが自動的であるという見方(Haidt, 2008)にも通ずるものである。

一方、MIS以外の方法で道徳的アイデンティティを測定した研究においても道徳的アイデンティティと道徳的行動の関係について多くの示唆が得られている。例えば、向社会的道徳アイデンティティ、向社会的道徳的推論、共感の相対的な重要性を調べた研究(Hardy, 2006)では、向社会的道徳アイデンティティが向社会的行動全般に影響を与えていることが確認された。すなわち、向社会的道徳アイデンティティが高い人は、一般的に他者や社会に対してより貢献的で協力的な行動をとる傾向があるということである。

青年期における道徳的アイデンティティの役割について、道徳的アイデンティティ、道徳的判断力、社会的自

己効力感が、青年期の向社会的行動にどの程度寄与するかを検討した研究(Patrick et al., 2018)では、道徳的アイデンティティは、様々なタイプの向社会的行動のほとんどを予測し、道徳的アイデンティティが高い青年は、他者や社会に対してより強い正義感や公平感を持ち、より多くの支援や協力をを行う傾向があることが示唆された。

さらに、青年期における道徳的アイデンティティの役割について、道徳的アイデンティティ、道徳的判断力、社会的自己効力感が、青年のいじめに対する傍観者行動にどのように相対的に寄与するかを検討した(Patrick et al., 2018)結果、道徳的アイデンティティが高く、自分が社会的な状況に対処できると信じている青年は、いじめに対してより積極的に介入する傾向があった。また、道徳的アイデンティティは道徳的判断と正の相関があり、道徳的アイデンティティが高く、正しい行動を選択する能力が高い青年は、いじめに加担したり見逃したりすることを避ける傾向があることも示された。

Lapsley と Narvaez(2004)は、自己調節スキーマ尺度(Self-Regulatory Schema Scale)で測定した道徳的アイデンティティが MIS で測定したものよりも強く非道徳的行動に関連していることを示した。自己調節スキーマ尺度では、参加者に自分自身や他者に関する一連の質問に回答するよう求められ(Lapsley & Narvaez, 2004)、参加者がどのような基準で自分自身や他者を評価しているかを測定することができる。この研究は、道徳的アイデンティティの測定方法によって、その概念や効果が異なることを示唆している。とはいえ、道徳的アイデンティティが道徳的行動に促進的な影響を与えるという点に関して齟齬が見られるわけではない。

しかしながら、そのような道徳的アイデンティティの影響によって促される道徳的行動について、それが本当に道徳的といえるかどうかについては、懐疑的な見方もある。例えば Batson ら(Batson et al., 2002)は、道徳的欺瞞(道徳的に振舞いながらも自己利益を追求すること)についての研究において、個人は主に肯定的な道徳的自己観を維持する一方で、実際に道徳的に行動するコストを回避したいという動機づけがあることを示した。彼らは、個人は道徳的に行動することなく、道徳的に見せたいのであり、個人は道徳的誠実さよりもむしろ道徳的欺瞞によって動機づけられると主張した。同様に、Sachdeva ら(Sachdeva et al., 2009)は、モラル・ライセンス(道徳的な免罪符。過去の行動によって自己の道徳的な評価を高めたと感じた結果、その後の行動でより自由な行動を取るようになること)に関する研究で、人の道徳的アイデンティティが肯定的に確認されることで、将来の道徳的行動への身構えが損なわれることを報告した。自分の過去の行動が道徳的アイデンティティと一致していると信じている場合、人は不道徳な行動をすることを許可されていると感じる。これらの研究は、道徳的アイデンティティが必ずしも道徳的行動を促進するとは限らないことを示唆している。

Mulder と Aquino(2013)は、道徳的アイデンティティが高い人は、嘘をついたときに、その嘘と一貫した行動をとるのではなく、その後に真実を話すことで嘘を補うことを好むことを示した。しかしこれは、過去の行動とは質的に異なる行動をとった場合のみであり、積極的に嘘をつく場合のみに見出された。また興味深いことに、このような代償行動は嘘に関してのみ示され、他の不正行為の場合には再現できなかった。つまり道徳的アイデンティティが高い人は、自らの非道徳的行為に対して、必ずしも一貫性のある態度をとっているわけではないということである。

Dong ら(Dong et al., 2019)は、道徳的アイデンティティの内面化と道徳的優越感(自分や自分が属する集団が他よりも道徳的に優越している、という信念)が、向社会的行動に与える影響を調べた。彼らは、道徳的優越感と道徳的アイデンティティの内面化の程度が強いほど、公の場では道徳的な行動を選択するようになる一方で、私的な道徳的誠実さの選択は多くならなかったことを見出した。道徳的優越性と道徳的アイデンティティは、実際に道徳的であることよりも、道徳的であるように見せたいという人々の願望を予測し、これは道徳的欺瞞の概念と一致するパターンである。

Reynolds と Ceranic(2007)は、道徳的アイデンティティが、道徳的判断と独立して道徳的行動に影響を及ぼす一方で、道徳的アイデンティティの効果が状況によって変化することを明らかにした。道徳的アイデンティティは、道徳的な行動の評判的文脈に敏感であり、個人は自分の行動が他者にどのように評価されるかに基づいて行動を選択することがある。その意味で道徳的アイデンティティは、道徳的性質よりも、動機付けとしての性質の方が強い可能性がある。このようなことから、彼らは道徳的アイデンティティについて「当初考えられていたほど『道徳的』なものではない」(Reynolds&Ceranic, 2007)と述べている。

Hertz と Krettenauer(2016)は、道徳的アイデンティティが行動に与える影響について、111の研究をメタ分析した結果、前述のような効果を含めても、全体としては道徳的アイデンティティが道徳的行動を肯定的に予測するものであることを認めている。しかし彼らは、その予測効果の大きさは小さいか中程度であり、あらゆるタイプの社会心理学的研究で平均的な効果サイズに近いものであるとも指摘した。ゆえに、道徳的アイデンティティ



は道徳的行動を特別に強く予測する因子ではなく、他の因子を犠牲にして道徳的アイデンティティを優先させる理由はないと結論づけている。そして、「道徳的アイデンティティをより広範な概念的枠組みで検討する方が適切であり、そこでは道徳的アイデンティティが他の個人的要因や状況的要因と相互作用して道徳的行動をもたらすと考えられる(Hertz&Krettenauer, 2016)」と提言した。

## 道徳的アイデンティティの発達

道徳的アイデンティティについての研究では、主に成人における成熟した形態について明らかにしようとするものがほとんどであり、成熟に至る発達過程に関する研究は少ない。その中でも、先にも述べたFrimerとWalker(2009)は、道徳的アイデンティティの発達について、人格特性的な視点から貴重な研究を行っている。彼らの道徳的アイデンティティ発達の「和解モデル」によれば、人間の動機づけは、主体的価値観と共同体の価値観の間の基本的な二面性を伴う。個人は通常、自分自身の目標を達成するか、他者の目標を前進させるかのどちらかに向かつて行動する。この二重性は、一方の動機づけシステムを他方よりも優先させるか、あるいは両者を和解させることによって克服される。ここで和解とは、共同体の価値観を追求することが、主体的な欲求が満たされることと同義になるように、主体的価値観と共同体の価値観を統合することである。HardyとWalker(2014)によれば、主体的価値観と共同体の価値観の和解は青年期以降の道徳的成熟の特徴である。

このように、従来、道徳的アイデンティティの成熟については青年期以降のテーマであるとする考え方が中心であった。しかし近年、その概念的・実証的基盤を広げる必要があると考えられつつあり、青年期以前の道徳的アイデンティティの様相は有望な研究分野となっている。

Krettenauer(2020, 2022a, 2022b)は、Tomasello(2016, 中尾訳2020)らの考えを基底に、道徳的アイデンティティの発達研究に自己決定理論に基づいた新しい枠組みを提案した。それによれば、道徳的アイデンティティは道徳的な人間になるという目標として概念化される。この目標は以下の三つの次元で区別され、発達段階や状況に応じて変化しながら、道徳的行動を促進する。

- ①具体性から抽象性へ：子どもは道徳的な人間になるという目標を具体的な行動や規則に関連付けて捉えるが、成人はより抽象的な価値や原理に関連付けて捉えるようになる。
- ②外発性から内発性へ：子どもは道徳的な人間になるという目標を主に社会的評価や報酬に基づいて動機づけられるが、成人はより自己一貫性や自己決定に基づいて動機づけられるようになる。
- ③予防志向から促進志向へ：子どもは道徳的な人間になるという目標を主に自分の道徳的資質を失わないようにするために持つが、成人はより自分の道徳的理想を実現するために持つようになる。

これらの変化は、道徳的アイデンティティが道徳的行動や判断に及ぼす影響を説明する上で重要である。例えば、抽象的な目標を持つ人は、具体的な目標を持つ人よりも不道徳な行動をとる誘惑に抵抗しやすくなるが、同時にモラル・ライセンシングや道徳的欺瞞のリスクも高まる。同様に、内発性の高い目標を持つ人は、外発性の高い目標を持つ人よりも自己決定感や満足感が高まり、道徳的行動が自己アイデンティティの一部となるが、同時に道徳的離脱のリスクも高まる。最後に、促進志向の高い目標を持つ人は、予防志向の高い目標を持つ人よりも自己改善や自己成長に積極的になり、道徳的行動が自己実現の手段となるが、同時に自分自身の道徳的能力や判断を過大評価するリスクも高まる。

道徳的アイデンティティの発達を精緻に捉えるためには、今後のさらなる研究の成果を待たなければならないが、自己決定理論に基づいた枠組みは、道徳的アイデンティティが単一の構造ではなく、発達段階や状況に応じて変化する目標であるという視点を示し、それが道徳的行動に及ぼす複雑で多面的な影響を発達的に理解することに貢献している。また、道徳的アイデンティティが道徳的行動を促進するだけでなく、時には阻害する可能性もあるという事実について発達の側面から説明しうるものである。このような意味で自己決定理論に基づいた枠組みは、道徳的アイデンティティの発達に関するこれまでの研究に対して、より包括的でバランスの取れた視点を提供すると言えるだろう。

## 今後の方向性と日本の道徳教育への示唆

道徳的アイデンティティ概念は、道徳的推論と道徳的行動との間にある潜在的なギャップを埋める助けになることが期待された。提唱された当初とは異なり、現在では道徳的アイデンティティが道徳的行動を強く予測する

因子であるという期待は弱くなっているといえよう。一方で、判断や感情など、様々な要因を調整する働きを担うものと捉える視点が示されたことにより、依然として現実の道徳的行動についての理解を深める重要な概念であることに変わりはない。また研究方法にも広がり生まれつつある。Aquino と Reed(2002)によって開発された道徳的アイデンティティ尺度 (SIM) は、研究者のニーズに非常に合っていたため、これまで圧倒的に広く使用される道徳的アイデンティティの測定法となってきた。しかし、MISが発達についての研究に寄与する力は限定的であった。また、この尺度の支配力の大きさが道徳的アイデンティティの構成概念に過度の均質化をもたらすという弊害となっていたかもしれない(Hertz&Krettenauer, 2016)。しかし、Lefebvreら(Lefebvre et al., 2023)は、発達の検討のために自己決定理論を取り入れた MIS の改訂を行うことで、人格特性モデルと社会的認知モデルとの統合の視点を描きつつある。

また、道徳的アイデンティティという概念本来の意味を問直すことによる、新しいアプローチも見られるようになってきた。Black と Reynolds は (2016) は、MIS が道徳的アイデンティティの本質的な側面である道徳的教訓に従って行動すること、すなわち誠実さの重要性が評価されていないことから、道徳的誠実性と道徳的自己を評価する道徳的アイデンティティ質問紙(Moral Identity Questionnaire: MIQ)を開発した。Tissotら (2022) は、向社会的行動についての予測力は MIS よりも MIQ が優れている手段であると結論付けている。また Bockら(Bock. et al., 2021)は、道徳的アイデンティティの構成概念に、哲学的裏付けのある「道徳的美徳」「コミットメント」「内省」からなる三つの不可欠で相互依存的な構成要素を含み、これらが時間の経過とともにシステムとして変化しうるものとして捉え、尺度の開発を行っている。今後ますます有望な研究分野ということができよう。

本稿は先行する海外の道徳的アイデンティティに関する研究を概観することで、日本の道徳教育においてこの概念がどのような影響力を持つのかを探ることを目的とした。では近年の研究の進展が道徳教育に寄与する点として、どのようなことが考えられるだろうか。まず、直接的な寄与が期待できるものとして、道徳的アイデンティティ発達についての知見があげられる。これまでの概念からすると、援用できる範囲は中学生以上であった。それが小学生、あるいは幼児の段階まで拡大して援用できるということになれば、幼児児童生徒へのアセスメントや評価、指導方法、カリキュラム等の改善や創造につながる可能性がある。また、道徳的アイデンティティの概念の拡充は、目標概念に新しい視点を与えるものになるかもしれない。ラーニングコンパスの比喩を引くまでもなく、今日求められる資質は、社会と調和しつつ、よりよい自己の生き方に向かって目標を設定し判断し、行動できる主体性である。こうした生き方の基盤となるのが道徳的アイデンティティの確立といえよう。道徳教育における道徳的アイデンティティ概念は、自分自身と世界をよりよい方向に導いていくモラル・エージェンシーの基盤となる鍵概念であり、その研究の広がりや深まりが期待されるものである。

## 文献

- Aquino K, Freeman D, Reed A II, Lim VKG, Felps W. Testing a social-cognitive model of moral behavior: The interactive influence of situations and moral identity centrality. *Journal of Personality and Social Psychology*. 2009; 97(1): 123-141.
- Aquino K, Kay A. A social cognitive model of moral identity. In: Gray K, Graham J, eds. *Atlas of Moral Psychology*. The Guilford Press; 2018: 133-140.
- Aquino K, McFerran B, Laven M. Moral identity and the experience of moral elevation in response to acts of uncommon goodness. *Journal of Personality and Social Psychology*. 2011; 100(4): 703-718.
- Aquino K, Reed A II. The self-importance of moral identity. *Journal of Personality and Social Psychology*. 2002; 83(6): 1423-1440.
- Bandura A. Moral Disengagement in the Perpetration of Inhumanities. *Personality & Social Psychology Review (Lawrence Erlbaum Associates)*. 1999; 3(3): 193.
- Batson CD, Thompson ER, Chen H. Moral hypocrisy: Addressing some alternatives. *Journal of Personality and Social Psychology*. 2002; 83(2): 330-339.
- Black JE, Reynolds WM. Development, reliability, and validity of the Moral Identity Questionnaire. *Personality and Individual Differences*. 2016; 97: 120-129.
- Blasi A. Moral cognition and moral action: A theoretical perspective. *Developmental Review*. 1983; 3(2): 178-210.



- Blasi, A. Moral identity: Its role in moral functioning. In W. Kurtines & J. Gewirtz(Eds.), *Morality, moral behavior and moral development*(pp.128-139). 1984. New York: Wiley.
- Blasi A. Moral Functioning: Moral Understanding and Personality. In: Lapsley DK, Narvaez D, eds. *Moral Development, Self, and Identity*. Lawrence Erlbaum Associates Publishers; 2004: 335-347.
- Bock T, Giebel H, Hazelbaker T, Tufte L. Integrating Thomistic virtue ethics with an Eriksonian identity perspective: A new moral identity assessment. *Journal of Moral Education*. 2021; 50(2): 185-201.
- Bock T, Samuelson PL. Educating for Moral Identity. *Journal of Character Education*. 2014; 10(2): 155-174.
- Colby A, Damon W, *Some do care: contemporary lives of moral commitment*, Free Press; 1992
- Damon W, Colby A. *The Power of Ideals: The Real Story of Moral Choice*. Oxford University Press; 2015.  
(ウイリアム・デーモン アン・コルビー 渡部弥生 山岸明子 渡部晶子 (訳) 2020 モラルを育む〈理想〉の力：人はいかにして道徳的に生きられるのか 北大路書房)
- Dong M, van Prooijen J-W, van Lange PAM. Self-enhancement in moral hypocrisy: Moral superiority and moral identity are about better appearances. *PLoS ONE*. 2019; 14(7): 1-17.
- Frimmer JA, Walker LJ. Reconciling the self and morality: An empirical model of moral centrality development. *Developmental Psychology*. 2009; 45(6): 1669-1681.
- Frimmer JA, Walker LJ, Dunlop WL, Lee BH, Riches A. The integration of agency and communion in moral personality: Evidence of enlightened self-interest. *Journal of Personality and Social Psychology*. 2011; 101(1): 149-163.
- Gotowiec S, van Mastrigt S. Having versus doing: The roles of moral identity internalization and symbolization for prosocial behaviors. *Journal of Social Psychology*. 2019; 159(1): 75-91.
- Haidt J. The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. In: Adler JE, Rips LJ, eds. *Reasoning: Studies of Human Inference and Its Foundations*. Cambridge University Press; 2008: 1024-1052.
- Hardy S. Identity, Reasoning, and Emotion: An Empirical Comparison of Three Sources of Moral Motivation. *Motivation & Emotion*. 2006; 30(3): 205-213.
- Hardy SA, Carlo G. Moral identity. In: Schwartz SJ, Luyckx K, Vignoles VL, eds. *Handbook of Identity Theory and Research*, Vols.1 and 2. Springer Science + Business Media; 2011: 495-513.a
- Hardy SA, Walker LJ, Olsen JA, Woodbury RD, Hickman JR. Moral identity as moral ideal self: Links to adolescent outcomes. *Developmental Psychology*. 2014; 50(1): 45-57.
- Hertz SG, Krettenauer T. Does moral identity effectively predict moral behavior?: A meta-analysis. *Review of General Psychology*. 2016; 20(2): 129-140.
- Jennings PL, Mitchell MS, Hannah ST. The moral self: A review and integration of the literature. *Journal of Organizational Behavior*. 2015; 36(Suppl 1): S104-S168.
- 川崎惣一. 道徳的アイデンティティの成り立ちについて. 宮城教育大学紀要. 2022. 第56巻91-101
- 河村悠太, 石黒翔, 西端和志, 星野春香, 山下環奈, 渡邊智也, 楠見孝. 日本語版道徳アイデンティティ尺度作成と妥当性の検討. 日本心理学会大会発表論文集. 2017. 81巻
- Krettenauer T. Moral identity as a goal of moral action: A Self-Determination Theory perspective. *Journal of Moral Education*. 2020; 49(3): 330-345.
- Krettenauer T. Development of moral identity: From the age of responsibility to adult maturity. *Developmental Review*. 2022a; 65: 1-11.
- Krettenauer T. When moral identity undermines moral behavior: An integrative framework. *Social and Personality Psychology Compass*. 2022b; 16(3).
- Lapsley D, Narvaez D. A Social-Cognitive Approach to the Moral Personality. In: Lapsley DK, Narvaez D, eds. *Moral Development, Self, and Identity*. Lawrence Erlbaum Associates Publishers; 2004: 189-212.
- Lefebvre JP, Goddeeris H, Hamzagic ZI, Krettenauer T. Moral identity goal characteristics: Age-related trends from early adolescence to old age. *Developmental psychology*. September 2023.
- 松尾直博. Development, reliability and validity of the Moral Identity Scale for Japanese Junior high school students. *Association for Moral Education*. 2016. 12. 10

- 松尾直博 児童・青年期のモラル・アイデンティティの発達に関する実証的研究. 2016～2017年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2)研究成果報告書, 2017.
- 文部科学省 2017a 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編 文部科学省
- 文部科学省 2017b 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編 文部科学省
- 文部科学省 2018 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説総則編 文部科学省
- Mulder LB, Aquino K. The role of moral identity in the aftermath of dishonesty. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*. 2013; 121(2): 219-230.
- O'Reilly J, Aquino K, Skarlicki D. The lives of others: Third parties 'responses to others' injustice. *Journal of Applied Psychology*. 2016; 101(2): 171-189.
- Patrick RB, Bodine AJ, Gibbs JC, Basinger KS. What Accounts for Prosocial Behavior? Roles of Moral Identity, Moral Judgment, and Self-Efficacy Beliefs. *Journal of Genetic Psychology*. 2018; 179(5): 231-245.
- Reed A II, Aquino KF. Moral identity and the expanding circle of moral regard toward out-groups. *Journal of Personality and Social Psychology*. 2003; 84(6): 1270-1286
- Reed A II, Aquino K, Levy E. Moral Identity and Judgments of Charitable Behaviors. *Journal of Marketing*. 2007; 71(1): 178-193.
- Reed II A, Finnel S, Kay A, Aquino K, Levy E. I Don't Want the Money, I Just Want Your Time: How Moral Identity Overcomes the Aversion to Giving Time to Prosocial Causes. *Journal of Personality & Social Psychology*. 2016; 110(3): 435-457.
- Reynolds SJ. A neurocognitive model of the ethical decision-making process: Implications for study and practice. *Journal of Applied Psychology*, [s. l.], v.91,n.4,2006.p.737-748,
- Reynolds SJ, Ceranic TL. The effects of moral judgment and moral identity on moral behavior: An empirical examination of the moral individual. *Journal of Applied Psychology*. 2007; 92(6): 1610-1624.
- Sachdeva S, Iliev R, Medin DL. Sinning Saints and Saintly Sinners: The Paradox of Moral Self-Regulation. *Psychological Science*(0956-7976). 2009; 20(4): 523-528.
- Schipper N, Koglin U. The association between moral identity and moral decisions in adolescents. *New Directions for Child & Adolescent Development*. 2021; 2021(179): 111-125.
- 高井弘弥, 寺井朋子. 道徳的アイデンティティと非道徳的行動に対する善悪判断の関係. *感情心理学研究*. 2013. 21巻 Supplement 号 p. 22
- 高井弘弥, 寺井朋子. 道徳的直感・共感性・道徳的アイデンティティが逸脱行動の判断に及ぼす影響. *教育学研究論集*. 2019. 14号: 17-25
- Tissot TT, Van Hiel A, Haerens L, Constandt B. The moral identity questionnaire predicts prosocial behavior better than the moral identity scale. *Current Psychology: A Journal for Diverse Perspectives on Diverse Psychological Issues*. July 2022.
- Tomasello M. *A Natural History of Human Morality*. Harvard University Press; 2016. (マイケル・トマセロ 中尾央 (訳) 2020道徳の自然史 勁草書房)
- Walker, LJ.; Pitts, RC. Naturalistic conceptions of moral maturity. *Developmental Psychology*. 1998; Vol 34(3), May, 1998 pp.403-419.
- Winterich KP, Aquino K, Mittal V, Swartz R. When moral identity symbolization motivates prosocial behavior: The role of recognition and moral identity internalization. *Journal of Applied Psychology*. 2013; 98(5): 759-770.
- Winterich KP, Zhang Y, Mittal V. How political identity and charity positioning increase donations: Insights from Moral Foundations Theory. *International Journal of Research in Marketing*. 2012; 29(4): 346-354.
- Xu ZX, Ma HK. Does honesty result from moral will or moral grace? Why moral identity matters. *Journal of Business Ethics*. 2015; 127(2): 371-384.
- Yang L, Cai G, Yong S, Shi H. Moral identity: A mediation model of moral disengagement and altruistic attitude. *Social Behavior & Personality: an international journal*. 2020; 48(7): 1-13.

## **Review of foreign literature related to moral identity**

OKADA Yasutaka

Moral identity, described as individual differences in the extent to which morality is central to one's identity and integrated with one's personal values and goals, has attracted attention as a very important concept for understanding a person's moral behavior. This study reviews international research on moral identity. Moral identity can be considered both as a personality trait and as a socio-cognitive trait. Currently, more and more studies are measuring it as a socio-cognitive trait. Moral identity has been thought to predict moral behavior, but its effect is not so great; it is more appropriate to think of it as playing a coordinating role for each factor. In recent years, some studies have attempted to refine traditional research methods and psychological scales to elaborate on developmental mechanisms and constructs. We believe that the advancement of research on moral identity will contribute to the improvement of educational goals and methods for moral education in Japan. In the future, the development of a moral identity scale in Japan and research based on this scale in the context of the Japanese cultural background is desirable.